総務文教厚生常任委員会
道内視察調査報告

委員長　岡　本　美代子

総務文教厚生常任委員会（岡本・横関・杉原・大原・大江・佐々木・柏葉）は、8月27日から31日までの5日間、中頓別町、稚内市、三笠市、札幌市、恵庭市を訪問し、主に教育特区や子育て支援の取り組み状況について視察調査を行いました。

美幌町では、少子高齢化が進む中で、保健・医療・福祉の連携とネットワーク化を図るとともに、美幌の未来を支える子供達の環境づくりに努めていますが、より充実した政策の実現を図るため、所管の委員会として道内の先進地を視察することとなったものです。

中頓別町

中頓別町は、稚内市から南へ120㎞の内陸部に位置する、人口約2千3百人の酪農を基幹産業とする静かな山あいの町です。

ここでは、健康日本21の市町村計画の見直しが行われ、なかなかんべつ21の計画概要と取り組みについて伺いました。

①町民が計画策定に主体的に参画すること、②計画に基づいて町民が自ら実践すること、この2つをポイントに計画は策定されました。

一番の特徴は一人ひとりが取り組もうとする健康づくりを「宣言」として公表、冊子に掲載し、その目標の達成に向けて努力していく点が挙げられます。これまでに町民の約割の方が宣言し、健康で生き生きと暮らすためにできることを無理なく楽しみながら続けていくことです。

町では健康づくりをサポートするために、ノルディックウォーキングや森林浴ハイキングなど、地元の豊かな自然環境を活かした特色ある保健増進事業を展開しており、今後も、長期入院や寝たきりにならないための取り組みを推進することで、医療費の抑制を図りたいとの説明がありました。

本町と道の人口規模に大きな差があるものの、住民と行政との距離が近く、地元の良さを取り入れた事業展開が必要性を感じました。

稚内市

続いて訪問した稚内市は、日本の最北端に位置し、宗谷岬からわずか43㎞の距離にロシア連邦サハリン州を臨む、水産と観光を主産業とする人口約4万2千人の国境の街です。市長の熱い思いを受けて取り組まれている二つの教育特区について、現地視察を交えて調査しました。

「ワイワイ子育て事業」は、設置目的や機能、入所要件の異なる幼稚園と保育所を一元的に運営することで、子供と保護者にとって最良の環境を提供するものであり、平成16年6月に「幼保一元化」の認定を受けています。

特区の申請にあたっては、教育委員会に子ども課を新設することで保育事務を市から教育委員会へと委任。「民でできることは民で」という基本的な考えの下、私立幼稚園が保育業務に参入する際に施設整備する場合、建設費の一部補助を行っています。

市は、市内の主要な各地域に拠点となる私立の幼保一元化施設の整備を働きかける一方で、施設整備が不可能な地域については公立で低年齢児を、私立で幼稚園児を受け入れていく計画を持っており、将来の保育定員が成立していることと、政策実効の原動力が首長の強いリーダーシップにある点に衝撃を受けた視察でありました。

稚内市の視察調査

三笠市

続いての視察地・三笠市においても教育特区の取り組みについて調査しました。三笠市は旧産炭地という特殊性から人口が激減した地域であり、現在の人口は約1万2千人とピーク時の5分の1に減少しています。高齢化率も40％に達しており、厳しい財政状況にあります市民アンケートによって自立の道を選択した経過があります。

このために、地域を愛し、地域の発展を願う児童生徒の育成がまちづくりの重要課題であり、義務教育の9年間を見通した教育環境を整えることで、地域に信頼される学校づくりを進めようと、平成16年12月に「小中一貫教育特区」の認定を受けています。

説明を受ける委員長

ます。

市内には小学校5校、中学校3校があり、学校が近接している岡山小学校と置野中学校において、既存の教舎を活用することで小中一貫教育を実践しています。学年区分を「6・3・4制」から「2・3・4制」に変更するとともに、カリキュラムの無理のない接続に配慮する一方で、小学一年生から英語を学ぶ「国際科」の授業を行うなど、特徴的な取り組みを進めているとのことです。

校舎が離れているため、学校行事や教職員の連携などの面で課題も多いようですが、市単独で設置している教育研究所において、特区教科のあり方や教科指導に関する検証作業を行うなど、教育行政をまちづくりの中心に置いていることが伝わってくる視察でありました。

札幌市

札幌市では、都心部に整備された子ども関連の複合施設を訪問し、市の子育て支援に関する取り組みについて説明を受けました。

児童数の減少から都心部にある4つの小学校を統廃合し、新たに資生館小学校を建設。その際に、0歳児から児童期までの子育て支援関連施設を一体的に整備したものであり、平成16年4月の開設から4年目を迎えています。

小学校・ミニ児童会館、保育園・子育て支援センターの4施設が併設する複合施設は「交流・地域・環境・安全」をキーワードに運営されており、様々な工夫が見受けられました。

施設1階に設けた共用スペース（交流ラウンジ）や天然芝が広がるグラウンドは、子供達や保護者など利用者の自然な交流が生まれる空間となっています。また、繁華街の中に位置することから警備員2名を常時配置、利用者には「ICカード」の携帯を義務づけるなど安全面にも十分配慮されていました。小学校の教室や職員室には廊下との壁がなく開放感にあふれており、ランチルームや室内プールの施設も整えるなど、未来都市型の施設でした。

複合施設を見学

恵庭市

最後に視察しました恵庭市は、札幌から車でわずか30分の距離にあり、人口約6万8千人が暮らす「花とガーデニングのまち」として全国的に有名です。ここでは「恵庭で子どもを育てる」「恵庭で親子になる」をスローガンに、子育て支援をまちづくりの核として取り組んでいる状況を調査しました。

絵本を通して赤ちゃんと保護者が温かい時間を分かち合うブックスタート事業に、全国に先駆けて取り組んだのが恵庭市です。9～10カ月健診を受けた親子に、ボランティアが絵本を読み聞かせ、その際に2冊の絵本をプレゼントします。本年4月からは、1歳6カ月健診時にも絵本を届ける「セカンドブックスタート」事業も行っているとのことです。

また、平成16年度からは市負担による幼児向け市内の小学校全校に専任の司書を配置するとともに、各学校への図書購入費として年間2千万円を予算措置するなど、子どもの読書活動を積極的に推進しています。読書を通じて学校や地域社会において想像力や表現力、さらには人とのコミュニケーションを上手にできる子どもを育てる狙いがあります。

こうした市の取り組みは多くの市民に支持されており、市立図書館の利用者数は1日平均で1千2百人を上回ります。

さらに、子育て家庭を応援する拠点施設として子どもセンター（児童館）の整備を、また、子どもを含めた家族が地域で成長できるプレイセンター建設を計画しているとのことです。

このような大胆な予算措置は市長の考えに基づいており、子育て支援に重点を置いている恵庭で育ちった子ども達が、将来、親として子育てする立場になったとき、自らが育った恵庭を選んでくれることこそが、まちづくりの原動力になっていることの説明を受けました。

札幌への通勤圏に位置し、年々人口が増加しているという背景もありますが、先を見据えた政策を打ち出し、積極的な取り組みを行っていると共通認識の印象を強く受けました。

恵庭市の視察調査

以上、視察先の取り組みを紹介いたしましたが、いずれの市町においても、まちづくりに対する熱い思いと強い行動力が、政策実現の原動力であることを改めて認識した視察調査でありました。

美幌町の政策課題について、今回の視察で得られた情報を福に各委員が研鑽を重ね、委員会として意見反映できるよう、今後も活動を続けて参ります。